

これからの磐城 その2

磐城高校は、中学校の学びを確認し、更なる学びへの深化を促しながら、地域格差を超えて、都市圏にはない自然との関わりから生まれる課題意識と、主体的で対話的な深い学びへの誘いを含め、現在の社会の枠組みそのものからの大きなイノベーションへの構造的転換を目指した学びを構築しなければなりません。

さしあたって、来年度入学生から、物理基礎を1年次に履修します。特に、理系の難関校への進学実績を高めるために、3年間を見通した物理嫌いをなくす理科教育に着手します。

さらには、単位制への導入を進めて、令和3年度の入学生からは、コース制を基にした単位制への転換を図り、進路を意識しながら、アクティブラーニングの本格的導入に向け、各教科での考察に入りたいと考えます。

県中地区に於いて、新しい中高一貫校が導入される議論が始まれば、いわき地区初めての公立中高一貫教育へ、どのようなあり方が望ましいかを含め、様々な議論を下に、魅力的な独自の教育を構築する必要があります。

私立の中高一貫教育においては、数学の進度を速め、5年間で数学ⅢCまで先取りすることがよく知られていますが、地歴公民や理科においても、先取りして山川の世界史や日本史の教科書を体系的に学習したり、国語の現代文の読み取り方の技術を高める教育を行ったり、英語においては、ヒアリング能力を高め、量的な処理能力に対応できる英語表現能力を培ったりしているのです。

高校教育は、進学のためのものだけではありません。人格の完成を目指し、様々なコミュニケーション能力の身長をはかる場であると考えます。しかし、都市部における様々な対応策に指をくわえてみているだけではいけないと思います。

大学に行って、その人々との出会いの中で、自己を主張し、その論理構成力を使って、様々な機会を生かしていくためにも、基礎基本的な取り組み方について、地方ならではの長を生かしながら、進める必要があります。

キーワードは、小学校からの圧倒的な読書量です。読書を促すネットワーク作りと、自己の研究課題にとことん取り組む興味関心を育てる姿勢作りであると思います。

計算能力の伸長や漢字の書き取りも大切です。そこにある構造を意識させ、英語の対話も早くから取り組む必要があります。なにより、このグローバルな世界の中で自校の寄って立つところの「日本」を理解することが肝要でしょう。安心安全な時間が確保されている魅力ある毎日がある学校であることが、何より一番大切なことではないでしょうか。